たランやスミレについても特に深い関心をもたれ，昭和46年「原色日本のラン」をまとめて出版されました。博士の研究は更に植物の形態，発生，系統についての諸問題に発展し，托葉起源論，葉類説，古赤道分布論など独創的な仮説を発表されたことも周知の通りであります。一方，著名な漢学者であった御父上の跡をうけて和漢の古典にくわしく植物和名の語源についても色々新しい見解をだされました。

本誌とのかかわりは深く，第9巻（1933）に日本産カンアオイ類の研究が連載されて以来，数多くの研究を本誌上で発表されてきました。また27巻（1952）以降今日に至るまで編集員として本誌の発展に貢献してこられました。博士の読書欲は最近になっても益々盛んで，昨年11月号まで多くの書評を書かれたことも読者の記憶にまだ新たなことと思います。

博士を失ったことは本誌だけでなく日本の学界のため誠に大きな損失であり，ここに博士の多年にわたる御貢献を偲びつつ深く哀悼の意を表わすと共に，博士の御冥福を心から御祈りする次第であります。（原　寛 Hiroshi HARA）

□前川文夫博士の思い出 In memory of Dr. Fumio MAEKAWA

君はあと2年足らずで喜寿を迎えるという年で逝って仕舞った。

先日，君の知己で高円寺に住む医者と，告別式の席上で藤田博士（一高時代の私の同級生，天文学者，学士院会員）より文夫君の府立4中や名古屋の高等学校時代の話を聞くことが出来た。植物採集に熱心で，また大賀教授より個人的にも植物学の話を聞いていたようである。

ここに多くの人々に人望のあった君の思い出を綴って見たいと思う。1975年，国際植物学会議がレニングラードで開かれた際私は君と一緒に参加したが，是が只一回の一緒の外国旅行であった。家族に見送られて横浜港でバイカル丸に乗船，翌日ナホトカ上陸，汽車でハバロフスク着，ここで林業試験場を見学し，ミチューリンのリンゴを見た。レニングラードでは会議の合間にサーカスを見た。宿の前には日露戦争で只一隻帰ることの出来た戦艦が係留されて居り，時々その長い煙突からポッポッと煙が出るのを君は興味深くながめていた。会議後のエキスカーションはアルメニヤ行にした。主都エレバンの宿，岩窟のキリスト教の遺跡，サマルカンドの市場巡りと羊肉のシャシリーク，タシケントの果物や漢薬の市場など思い出の深いものであった。イルクーツクでは君の妹君の夫君，窪田章二郎君の弟君が眠っている日本人墓地を尋ねた。バイカル湖畔の博物館，横浜港上陸の際の出迎えの人々など，君と一緒したこの旅は私にとっては末永く思い出になることと思う。

昭和7年に植物学科卒業後，助手となり中井教授の次の室で研究に従事した。当時教授が竹笹類の研究をして居られたので，これに興味を抱き，多くの種類を採集し，また葉の肩の毛を興味深くスケッチして居た。学位論文はギボウシ属のモノグラフで，原稿

故 前川文夫博士と令夫人。新婚時代に自宅の庭で撮ったものと思われる。

がまとまりかけたころ応召したので，小林がこれを整理して，下田の宿で中井先生の校閲を受け理学博士の学位を受けた。出版されたのは1940年であった。次いで一生を捧げて専念したのがカンアオイ属のモノグラフで，新属アシアサルムも設けた。国外では台湾や中国南部までも採集の手を延ばし，それらの生品は自宅の庭に栽培して観察を続けた。また中南米へ行く機会を得てから古赤道に関心を抱くようになった。これは地学者によって唱えられた説であるが，君は植物の分布によりこれを実証し，多くの学者の共感を得ている。ドクウツギ属がその主な資料であるが，後にはカワノリ属や蘚苔類でもこの説は裏書き出来ると指摘した。私は蛇足ではあるが，椎茸の分布も部分的ではあるが参考資料になると思う。また君は米の分布をはじめとして，日本領土を植物分布によって区別し，植物分布により大陸と日本との連結を推定し，たしかマキネシアの名も君の命名であった。その他数多くの植物形態，分布，分類学の論文を出している。

1月16日に行われた宝仙寺に於ける葬儀には500名ほどの参列者があり，天皇陛下より御供物を賜わった。棺の中の君の死顔は真に温和そのもので，1時間後の変り果てた遺骨の純白さとともに強い印象を受けた。私は君の愛したオオカンアオイの一輪の花と一枚の葉を棺の中に入れて貰った。

君には3人の妹が居たが，今は長妹一人になって仕舞った。その夫君も先年他界して居られる。調布にある都の墓園で両親や夫人とともに永い眠りについた。

(小林義雄　Yosio KOBAYASI)